**ポスト歴史時代の自由と冒険――エルンスト・ユンガーの紀行文を手掛かりに**

報告者　川野　正嗣（京都大学人間・環境学研究科博士後期課程）

司会　森川　輝一（京都大学大学院法学研究科教授）

1. **報告概要**

本報告においては、エルンスト・ユンガー（1895-1998）の紀行文を考察の対象として、そこから「森」や「冒険」など、ユンガーの歴史哲学的思想形成に寄与した重要なモチーフを読み取ることで、単なるマルジナリアや日記文学のバリエーションとみなされてきたユンガーの紀行文に新たな視点を提示した。

ユンガーによれば、「総動員」世界とはグローバル化し、「脱魔術化」され、「神が死んだ」後のニヒリズムの世界のことである。ユンガーは「歴史の父」ヘロドトスを導き手としながら、ポスト歴史時代である「総動員」世界の拡大とその猛威の実地見聞をしながら、世界各地にある自由の場である「森」を探しだし、それを記述することを試みる。その意味では、紀行文は「ユンガーの過激な初期作品に対するアンチテーゼ」であるだけでなく、むしろ「総動員」という初期ユンガーの時代診断を補強するものだといえる。

1. **質疑応答概要**
2. **ユンガーの「労働者」の「形態Gestalt」は、「森を行く人」に見出されるか。**

解答：ユンガーは「労働者」と「森を行く人」を別の「形態」として捉えている。『森を行く』（1951）の中でユンガーは形態を三つに分類し、「労働者(Arbeiter)」「無名兵士（Namenlose）」「森を行く人（Waldgänger）」を現代の人間像として示している。

1. **技術批判から森に向かう後期ハイデガーとの影響関係について。**

解答：これまでユンガーの作品（とりわけ『総動員』（1930）や『労働者』(1932)）というのは、ハイデガーの技術論のたたき台という解釈がなされてきた。ハイデガーはユンガーの『労働者』におけるニーチェ受容を「形而上学の完成」や「存在忘却」とみなしており、ユンガーとの対決は「力への意志」の影響下にあったハイデガー自身の初期の構想との対決であったともいえる。

ハイデガーは1950年代におけるユンガーとの応酬において、ニヒリズムを超えるというユンガーの能動的な姿勢を批判し、超えられる機会を耐忍することを強調している。更に技術論については、ユンガーにおける形態へのこだわりをゲシュテル（Ge-stell）への埋没と評しているが、これらの点におけるハイデガーのユンガー解釈は、『労働者』のユンガー像に固執しており、ユンガーが1940年代にニーチェの影響圏から離脱したというニーチェ受容の変化やその思想上の深化が反映されていないと言える。

1. **マクロなパースペクティブについて、「ポスト歴史時代」において、旅をし、「森」を行くユンガーの思想は、どのような「自由」を指し示すものか。**

解答：とりわけ後期ユンガーは「内面の自由」ということを強調しており、自身の思想を小説の登場人物という形で「実践」的に描くことが多いが（例えば『大理石の崖の上で』（1939）『ヘリオーポリス』(1949)『オイメスヴィル』(1971)など）、紀行文の登場人物もまた同様にこのような思想の実践者として描かれている。そこでは、「森を行く人」を自称するユンガー自身の目線や観察眼が発揮されており、主要なテーマとして、廃墟や史跡などの歴史的空間における「労働」や、現地の人々との交歓を通じての歴史の「想起」がとりあげられる。更にそのまなざしは、「総動員」世界の外部に存するような非因果的な、アシンメトリーな、「自由」な事象にも向けられているが、このような試みは「形而上学的な武装」によって、技術のニヒリズムを克服するという後期ユンガーの思想と合致するものである。このように、ユンガーは、これまでの歴史の中にみられた「根源的な自由」の残滓を特殊な光学で看取し、記述することによって、「総動員」時代を克服する為の「自由」を模索しているのである。